

『#国宝』（李相日監督、2025年）を週末、妻と劇場で視聴した。原作は『国宝』（吉田修一著）』（2017年1月1日から2018年5月29日にかけて朝日新聞に掲載）である。著者は、歌舞伎座で黒衣となって密着取材している。

歌舞伎界のことを描いた映画という触れ込みで観に行ったが、それを遥かに超えたレベルであった。大名跡を継ぐのは血筋か、はたまた芸の力か。何よりも人生は山あり、谷ありであることを教えてくれる。30分ごとに山場があり、3時間があっという間であった。その理由は、劇中に挿入される歌舞伎演目が物語の節目と呼応しているからだ（評論家の意見）。歌舞伎の演目は単なる“再現”ではなく、喜久雄の人生の局面そのものを象徴する鏡として配置されている（「関の扉」、「二人藤娘」、「連獅子」、「二人道成寺」、「曾根崎心中」、「鷺娘」）。

任侠一家に生まれた喜久雄が、抗争（冒頭のヤクザの討ち入り場面が大迫力）で15歳の時、父を亡くした後、上方歌舞伎の名門・花井半二郎に引き取られ、歌舞伎の世界に飛び込む。そこで名門の跡取り息子・俊介と出会い、兄弟のように育てられながらも、血筋と才能を巡るライバルとして芸を磨き、やがて日本を代表する役者へと成長していく。

その後、半二郎が事故で倒れ、代役を息子の俊介ではなく喜久雄を指名し（母親は大反対）、二人の関係と運命が大きく揺らぐ。「血筋」の俊介と「才能」の喜久雄、対照的な二人が、歌舞伎の世界で「国宝」と呼ばれる存在を目指し、愛憎や裏切り、歓喜と絶望を経験しながら、それぞれの道を歩んでいく（一方がもてはやさせるともう片方は沈み、時が流れてその二人の立場が逆転する）。血筋で決まる世界に、外から来た者が芸だけを武器に挑む。その構図は歌舞伎界の伝統を描きながら、同時に普遍的な「人がどう生きるか」というテーマとなっている。

“血が人を縛りも救いもする”という現実を提示する。対照的な二人が互いを高め合う“宿命のライバル”であり、この二人の歩みがそのまま人生の縮図として描かれている。本作では、歌舞伎界の華やかさよりも、そこに生きる人々の痛み・誇り・孤独・執念を丁寧に掘り下げている。

本作は「歌舞伎映画を超えている」。芸道映画でありながら、人生そのものを描くヒューマンドラマとして成立している。人がどう生き、どう継ぎ、どう愛し、どう失うかという普遍的なテーマを扱っている。

2025年、最良の映画であり、必見の映画である。

「血筋を芸で超える」というテーマでは、落語や講談の『中村仲蔵』が有名（YouTube で視聴できる講談は神田伯山、落語は古今亭志ん朝がお勧め）。中村仲蔵は、江戸時代の歌舞伎界において“血筋ではない者”が名跡を継ぎ、さらに芸によってその地位を揺るぎないものにした人物。芸の探究心と工夫で、ついに名題役者へと上り詰める。『仮名手本忠臣蔵』の「五段目・斧定九郎」の役作りで、仲蔵は従来の型を破り、独自の解釈で“悪役の美”を創り上げた。落語・講談の『中村仲蔵』は何度聞いても感動する。『#国宝』が描く世界は、まさにその延長線上にある。

評価：★★★★★+α